

# 橋弁慶

日吉佐阿弥作

前

シテ 武藏坊弁慶

トモ 徒者

後

子方 源牛若

シテ 前に同じ

季は 夏六月  
地は 京都

「是は西塔のかたはらに住む武藏坊弁慶にて候。我宿願の子細有つて。五条の天神へ。丑の時詣を仕り候。今日満参にて候ふ程に。唯今参らばやと存じ候。如何に誰か有る。」

「御前に候。」

シテ「五条の天神へ参らうするにて有るぞ其分心得候へ。」

トモ「畏つて候。又申すべき事の候。昨日五条の橋を通り候ふ所に。十二三ばかりなる幼き者。小太刀にて切つて廻り候ふは。さながら蝶鳥の如くなる由申し候。先々今夜の御物詣は。思し召し御止まりあれかしと存じ候。」

「言語道断の事を申す者かな。たとへば天魔鬼神なりとも。大勢には叶ふまじ。おつ取りこめて討たざらん。」

「おつ取りこむれば不思議にはづれ。敵を手元に寄せ付けず。」

シテ「手近く寄れば。

トモ「目にも。

シテ「見えず。

地「神変奇特不思議なる。く。化生の者に寄せ合せ。かしこう御身討たすらん。都広しと申せども。是程の者あらじ。實に奇なる者かな。

シテ詞「さあらば今夜は思ひ止まらうずるにて有るぞ。いや弁慶程の者の。聞き遁げは無念なり。今夜夜更ければ橋に行き。化生の者を平らげんと。

地「夕べ程なく暮方の。く。雲の氣色も引きかへて。風すさましく更くる夜を。遅しこそは待ち居たれ。く。(申入)

牛若「さても牛若は母の仰せの重ければ。明けなば寺へ上るべし。今宵ばかりの名残なれば。五条の橋に立ち出で。川波添へて忽ちに。月の光を待つべしと。

「夕波の。氣色はそれか夜嵐の。夕べ程なき秋の風。

「面白の氣色やな。く。そゞろ浮き立つ我心。波

も玉散る白露の。夕顔の花の色。五条の橋の橋板  
を。とゞろくと踏み鳴らし。音も静かに更くる  
夜に。通る人をぞ待ち居たる。く。

シテ詞

「既に此夜も明方の。三塔の鐘も杉間の雲の。光り  
かゝやく月の夜に。着たる鎧は黒革の。おどしに  
おどせる大鎧。草摺長に着なしつゝ。もとより好  
む大長刀。真中取つて打ちかつぎ。ゆらりくと  
出でたる有様。如何なる天魔鬼神なりとも。面  
を向くべきやうあらじと。我身ながらも物頼もし  
うて。手に立つ敵の恋しさよ。

牛若  
「川風も早更け過ぐる橋の面に。通る人もなきぞと  
て。心すゞげに休らへば。

シテ  
「弁慶かくとも白波の。立ち寄り渡る橋板を。さも  
あらゝかに踏み鳴らせば。

「牛若彼を見るよりも。すはやうれしや人来るぞと。薄衣猶も引きかづき。かたはらに寄り添ひたゞめば。

シテ  
「弁慶彼を見付けつゝ。言葉をかけんと思へども。見れば女の姿なり。私は出家の事なれば。思ひわづらひ過ぎて行く。

牛若  
「牛若彼をなぶつて見んと。行きちがひざまに長刀の。柄元をはつしと蹴上ぐれば。

シテ  
「すは痴者よ物見せんと。

地  
「長刀やがて取り直し。く。いで物見せん手並の程と。切つてかゝれば牛若は。少しも騒がずつゝ立ち直つて。薄衣引きのけつゝ。静々と太刀抜き放つて。つゝ支へたる長刀の。切先に太刀打ち合はせ。つめつ開いつ戦ひしが。何とかしたりけん。手元に牛若寄るとぞ見えしが。たゝみ重ねて打つ太刀に。さしもの弁慶合はせ兼ねて。橋桁を二三

間。しさつて肝をぞ消したりける。あら物々され程の。く。小性一人を切ればとて。手並にいかで洩らすべきと。長刀柄長くおつ取りのべて。走りかゝつてちやうと切れば。そむけて右に飛びちがふ。取り直して裾をなぎ払へば。踊りあがつて足もためず。中を払へば頭を地に付け。千々に戦ふ大長刀。打ち落されて力なく。組まんと寄れば切り払ふ。すがらんとするも便なし。せん方てゝぞ立つたりける。

ロング地  
「不思議や御身誰なれば。まだいとけなき姿にて。かほどけなげにましますぞ。委しく名乗りおはしませ。

牛若  
「今は何をか包むべき。我は源牛若。

地  
「義朝の御子か。

牛若  
「さて汝は。

地

「西塔の武藏弁慶なり。互に名乗り合ひ。く。降

参申さん御免あれ。少人の御事我は出家。位も  
氏も健気さも。よき主なれば頼むなり。麿忽にや  
思し召すらんさりながら。是又三世の奇縁の始め。  
今より後は主従ぞと。契約堅く申しつゝ。薄衣か  
づかせ奉り。弁慶も長刀打ちかついで。九条の御  
所へぞ参りける。